青山同窓会会報

発行所
青山同窓会
新潟市関屋下川原町二
新潟高校内
印刷所　オリオン印刷㈱
0252-83-2151

新年のごあいさつ

青山同窓会会長　鍵冨清一郎

明けましておめでとうございます。毎年、新年を迎えるたびに今年こそよい年であってほしいと願っております。

同窓会も、各学年幹事をはじめ皆さんの協力で、益々盛んになって、大変喜こばしい事です。母校と同じく、私も、九十才をすぎましたが、いつまでも元気で、皆さんと顔を合わせるのを楽しみにしています。

今年も愉快にやりましょう。

五十八年度総会報告

全員着席で懇親会

幹事長 50回 上村光司

昭和五十八年度青山同窓会総会は、七月十四日（木）午後六時から新潟市のオークラホテル新潟で開いた。出席者七百名余、東京同窓会から南学会長、田中幹事長、金山副幹事長の各氏も駆けつけた。会務報告、五十七年度決算、五十八年度予算を原案どおり承認、可決し、役員（任期二年）を鍵冨会長以下全員再任した。この正副会長三名のうち、死去された阿部藤策副会長の後任については、とりあえず不補充のままとなっている（総会後大塚進弥副幹事長が死去された）。同窓会会計は別項のとおりだが、五十七年度も会費納入が三百二十三万二千円と年々漸増を重ねており、上村幹事長から会員および各期幹事のご努力に謝意を申し述べた。

総会に続いて懇親会に移り、会長あいさつ、君知事らあいさつ、校歌斉唱、出席者中最年長期の28回松浦茂路氏の音頭で乾杯、懇談、応援歌と、ホテルの大宴会場が、談笑の熱気でうなりを立てるなかで交歓を尽くした。

と書いて来ると、例年と変哲もないようだが、この総会では幾つかの〝新しいもの〟が芽を出していた。

第一は実行委員会の若返りであった。過去三年間は筑波竜子君（五十三回）にご苦労を願って来たが、高校も三年制、いつまでも留年でご迷惑をかけるわけにもいくまいと、小林亨君（六十回）にバトン・タッチを願った。実行委員会の皆さんの顔ぶれは、ここ数年間ほとんど同じで、今回も特に変化はないのだが、それぞれ、これまでの経験と反省をこめて話合いを重ねたのである。

その中で生まれた第二の変化が「全員着席」の基本計画である。同窓会総会の会場は昔は母校内、続いでデパートの食堂であったが五百人総会を目標に信濃川畔の「香港」に移した。キャバレーで総会を開くとは何事かと、批判もあった「香港」だが、幸いにして出席者が年々増えて収容力限界に達し、たまたまオークラホテルの開業があって、ここに移した。しかしやはり、八百人―九百人総会を目指す場合収容力に問題があり、立食主体で会を重ねて来た。

しかし、この立食形式は根本的に難が多かった。食べ物の趣味を変えたり、休息用のイスを増やすなどの改善を重ねてはみたものの、限界がある。懇親会のヒケがだんだん早くなり、やっぱり「香港」の方がいいという声が出る。と言っても、いまさら五―六百人規模に縮少するのは下策だし、だいたい「香港」が廃業している。

――というわけで、従来も全員着席を検討しては、スペース的にいろいろ無理があると見送っていたが、それらを脇において、まず全員着席を第一にし、その結果生ずるかも知れないマイナス面（総収容人員、交歓のさいの移動交流など）は、出たら出たときのことと割り切った。実行委員会の決断だった。

ホテル側としては宴会の常識を越える配置だったようだが、小林実行委員長をはじめとする各位の折衝で当日を迎えた。結果としてどうであったかは、会員の皆さんのご意見を頂戴して、五十九年度総会に反映させたいが、懇談の時間が前年より相当長くなったのはうれしいことだった。

そのほか開会の時間を従来より三十分遅くしたり、抽選の景品に、当時開催中の新潟博覧会の入場券を当てたりしたが、そのため来場して花を添えてくれたミス新潟博の一人が、わが同窓であったのは、うれしい驚きだった。

恒例の当日最多出席の賞品（ボトル）獲得期は次のとおりであった。

一位64期44名、二位63期42名、三位78期・59期各33名、五位52・60期各30名

又、90周年募金に関しては、最高額62回生の六九万三千円と最大人員は51回生の百八十人であった。

《追悼》大塚進弥君の急逝を悼む

48回　都築　弘

四十八期会会長の大塚進弥君が急逝された。八月末、新大病院に入院してからも談論風発、「一生に一度くらいオーバーホールしなきゃあ…」と元気だったが、十月二十二日、俄かに心不全で他界された。まだ五十九歳だった。

大塚君は幼時、小児マヒで脚が不自由となり、小学生で父君を亡くされたが、明るく勇ましく、生来の腕白大将を押し通した一生だった。中学時代の夏休み、関屋堀割を埋めて射撃場を造る勤労奉仕でともにスコップを揮るい、休憩となるや裏の西爪畑へ突撃しては戦果を分かち、呵々大笑したのが忘れられない。この笑いっぷりは生涯みごとで、何か議論をして旗色が悪くなると、アッハッハと破顔一笑。つりこまれて議論はオシマイになったものだ。

昭和十九年、白山小での徴兵検査で不合格の判定に対して「戦死した兄さん二人の仇を討ちたい」と熱涙を飛ばし徴兵官に合格を迫った逸話は有名。法大時代は帰省すると、地区の若い男女を早朝、礎公園に呼集、奉仕やレクリエーションに率先して、早くもリーダーぶりを発揮した。

戦後、家業を再興、本町市場通商店街協組理事長を振り出しに、県中小企業団体中央会常任理事、新潟市商店街連盟副理事長（理事長代理）など多数を勤め、市の商業活動推進や新潟島活性化に取り組んで七面八臂の活躍は世人熟知のところ。戦後バラバラだった同期生をまとめる音頭をとったのも大塚だ。いつも手帳に会合や面会の日程がビッシリで十～十五分刻みのことも多かった。よく手帳をみせながら「こんなに忙しくて申し訳ないが、自分は一日のうち半分は商売に打ち込み、あとの半分は世間様に尽くすのをモットーにしている」と述懐、たいていのことは快諾してくれた。この家業プラス社会奉仕の全力投球が結局は、人生マラソンをハイピッチに太く短くしたといえる。新幹線や高速道の開通に伴う問題山積の矢先、惜しい人材だった。

家庭では二男二女の子宝に恵まれ、末っ子の次男、芳彦君の結婚式も十月末にきまり、主治医の許しを得て入院先からの参列を楽しみにしていたが、病い改まった十月二十二日、予定をくり上げて病室で挙式、新婦の指に指輪が納まったのを、最後の力を振りしぼって震える手で確かめ、うなずいたのが最後だった。

噫、好漢逝きぬ。

先年、京都へ家族旅行のさい、宇治川黄檗山万福寺の布袋（ほてい）像をみたお孫さんが「あっ、おじいちゃんそっくり」とはしゃいだという。この話をしては「いやあ」と相好を崩していたありし日の温容がたまらず、なつかしい。告別式で嗣子善紀君が「わたしは父を誇りに思っています」とあいさつされたが、愛児の心に誇りある父親像としていつまでも残るあなたの一生は、なんと倖せだったろう。安らかに神鎮み給えと哀悼の意を表します。

正月に想う

52回　佐藤　隆

（衆議院議員・自民党筆頭副幹事長）

甲子の年
まめに育くむ
福寿草

国内外の政治・経済きわめて厳しいおりながら、相変らず下手な歌を詠んで、新しい年を迎えさせていただきました。

自民党・新自由国民連合というわかりにくい形、しかし、円滑な国会運営、政局の安定のための大義のもと、新しい鉢に、国民期待の福寿草が、どのように育てられてゆくか。まずは、政府与党の立場で与えられた務めをまめに果してゆかねばと、誓いあらたにいたしております。

選挙の都度、同志各位にご心配をおかけし、ご激励をいただき恐縮しております。

この世の中で選挙ほど人さわがせなものはないと思っている私ですが、それだけに、「有難い」「すまない」という気持ちでいっぱいです。つね日頃のご厚情に心から感謝申し上げます。

青山同窓の名を恥かしめぬよう精進努力して参ります。

私の同級生（五十二期）も、役所づとめで停年のさびしさをかみしめながら、あらたな道をゆく者、孫の成長に目を細めている者、さまざまですが、そこに新しい活力が、お互いに生かし生かされるとするならば、これもまた倖せなことと思っております。

おらが郷土、わが日本を、今日よりも明日、明日よりも明後日と良くしてゆく為に政治があり、その責任は我にあり、青山健児にありと。正月早々、いささか気ばり過ぎた活字になりましたが、座右の銘、「忍と喝」を自分自身に言いきかせながら頑張りぬきたいと思っております。

同窓各位のご発展ご多幸をお祈り申し上げます。

《追悼》岡田正雄君逝く

39回　宮村定男

昭和五十八年九月二十一日四時五十五分、岡田正雄君は新潟大学第一外科で胃ガン再発により逝去された。

彼は昭和六年新潟中学四年修了で新潟高等学校理科乙類に入学、ついで新潟医科大学を昭和十三年卒業した秀才であった。卒業後直ちに海軍軍医として従軍、日本の運命を決した数々の海戦に出動し、幾多か辛酸をなめたが、幸に九死に一生を得て、昭和二十二年に漸く帰還した。この時代の人々が集まると必ずといってよい程戦場体験談が出るが、彼は殆んど自分では話さない。また書いたりもしない。

新潟に帰って後直ちに母校第一内科に入局、同時に新潟交通診療所に勤めた。この間に彼は心電図に関する優れた業績をあげた。今こそ心電図は心筋硬塞などの心疾患の診断に欠くべからざるものであるが、当時は一般外来にはまだ応用されていなかった。その道を開いた先見的の仕事であった。彼はこのように電気に詳しく、後日新潟アマ無線会の会長となり、また医師会の救護活動に無線をとりいれるという尖端的な事業の推進者となった。

昭和三十年、白山浦一丁目に内科医院を開業したが、その卓越した実力と、温厚な人柄で忽ち医院は隆盛を極めた。しかし彼への信望は、彼を一開業医として留めておかず、やがて乞われて新潟県市医師会の幹部となった。逝去直前まで県医師会では監事、市医師会では理事として活躍し、やがては日本医師会の役員にもなるであろうと期待されていた。

彼は人柄よく、朗らかで、世話好きで、人を区別することなく現代に珍らしい医者であった。こういう医者を失うということはことに悲しいことである。

また彼は美しい奥さんとの間に立派な一男・二女に恵まれ、家庭は幸福そのものであった。それだけに一層の無情を感ずる。

御冥福を祈るのみである。

《追悼》同期のまとめ役〝白山さま〟小林寛直君を悼む

49回 駒林行弘

〝白山さま〟小林寛直宮司が鳥帽子、直垂の装束で倒れ、意識の回復しないまま幽明境を異にした。十月二日のことだ。

無類のお人好しで面倒見のいい彼は、青山四十九期会の世話を一手に引き受けていた。私達同期のものも白山さまなら街の真中だし、動くこともないし、ということで安心して同期の中心に据え、何もかもおんぶしていた。

その中心が突然なくなったのだ。驚くやら、狼狽えるやら。早速有志が集って弔問にいった。安らかな死顔に接し、はじめて悲しみが実感として涌いてきた。お悔みを言い帰ろうとすると奥さんが「お父さんが寂しがりますからもう少し一緒に居て下さい。何といっても同級生の方が一番いいのですから」とおっしゃって下さる。お言葉に甘えて彼が大好きだったビールを飲みながら宮司の話にふける。

彼は附属小学校から旧制新潟中学へ、そして国学院大学神道科へ進み、神ながらの道を修めて、若くして白山神社の宮司となった。

新潟中学時代は剣道部に属し、剣道二段の腕前で常に対外試合のレギュラー選手として出場し大活躍したものだ。同じ剣道部だった柳生鏡渕小学校校長は「彼の剣道はのびのびとした正統派の剣道だった。そして明るい性格で、いつも冗談をいっては皆を笑わせており、とてもひょう軽なところがあった」といっている。

朝、星をいただいて東堀の斉藤道場へ稽古に通った想い出などをあとからよく話していたものだ。

宮司になってからが大変だった。戦後、敬神の気風がうすれ、神社など省りみられなかった時代が続いた。彼はあらゆる努力を惜しまなかった。そして今日、白山神社を新潟の総鎮守として、その地位を不動のものにした。

しかし、宮司はまだまだ白山神社をああもしたい、こうもしたいと夢を一杯もっていてよく話してくれたものだ。そのなかで、私も賛成し、実現してやりたい夢が一つある。

それは、白山公園と県民会館前ひろばの間にある道路を廃くして一体とし、信濃川河川敷と合せて緑の大きなひろばとすることだ。そのなかに、スポーツ、行政、文化、信仰をちりばめ、まちの中心として市民の想いのひろばとしようというものだ。

このようにロマンを持った男だった。死なせるには早すぎた。全く惜しい。

後日、お宅へお参りに行ったとき、お孫さんがいた。彼がいつも背中にくくりつけていた二才の初孫だ。「孫は無条件で可愛いいもんだ」という心やさしい男でもあった。

その孫に「おじいちゃん、どこへいったの」と聞くと「ウー、ガチャン」とくり返す。火葬場で鉄扉をしめられた印象が強烈だったのだ。それを聞いて涙している奥さんをみていると本当に悲しくなった。

奥さんが「この孫をとりあげていただいたのが竹山行雄先生ですし、頑固な湿疹ができてお世話になったのが阿部清雄先生です。孫まで同級生のお世話になっていますて」とおっしゃる。宮司の体を診ていたのが土谷幸治先生、家の相談は弘中建築士、外山さん、岩瀬さん、相沢さんなど皆さんには本当にお世話になりましたとのことだ。

まだある。長男の嫁さんは原猛君のところからきたし、お嬢さんは下喜八郎君の長男に嫁いだ。みんな同級生だ。

中学時代の五年間、無駄に飯を食っていなかったんだとつくづく感じている。

幸いなことに残された家族は皆しっかり者ばかり、長男も十一月一日に白山神社宮司を拝命し、立派に跡を継いでいる。

白山神社の森に行くたびに小林君を想い出し、神様に手を合わせると同時に、音の出ないかしわ手を打って宮司の冥福を祈ろうと思う。

小林君、四十九期会の面々が健やかに生きていく様をいつまでも見守っていてくれ。

《追悼》味方恭一君逝く

39回 福山健

七月十一日に味方君が逝去した。

昨年四月、我々青山三九会の卒業五十周年の会にはあんなに元気で出席してくれたのに、この三年間に胸膜の疾患のため八回も入院していたことを御遺族から聞かされて全く驚いた。君は京大卒業後、東北電力に勤務、昭和二十九年に御尊父の死去により、その後を受けて味方利造商店の経営に戻った。

それから三十年、県内酒販卸のまとめ役として、またサッポロビールの販売代理店として鋭意業界のため努力、その温和な人柄と商売熱心さは関係者のよく知るところ、全く得難い材だった。また多忙の身にもかかわらず我々の同期の会合には殆んど毎回出席してくれた。眼鏡の奥から笑いながら嬉しそうに盃を手にしていた姿を想い出す。

また君は輜重第二連隊（仙台）の主計将校として六年間、ガ島をはじめ南方各地に転戦して苦労を重ねている。

我々の飲み会にキリンビールが出ると、「お～い福山君、味方君が来ているんだ。サッポロだよ」と大声で注意してくれたその白勢君も既に他界している。

七月十七日の西堀、勝念寺の本葬は永年の取引関係から業界及び戦友会代表等で会葬者は本堂にあふれ盛儀であった。

三九会からは皆川竹次郎君と小生が会葬した。さて、白勢、斉藤、味方の三君はいづれ劣らぬ愛酒家、段位は上から斉藤、味方、白勢の順で今頃はお互の新盆を前に、冥界の銘酒をくみ交して古町美妓の噂さ話でも語り合っていることだろう。

味方恭一君の御冥福を祈る。

合掌（七月二十日記）

（附記）

八月十四日、新盆を迎えた三君のお宅にお参りに上る。勤務のためカナダ在住の斉藤庫之丞君には会えなかったが、白勢仁士君、味方耕一郎君いづれも母親の傍にあって挨拶す。心強いことだ。成人した伜たちが後を受けて健在である。三君の霊よ、安らかに眠ってくれ。

死亡報告

45回、金沢徳太郎氏、昭和58年12月28日逝去

47回、風間勲氏、昭和58年12月18日逝去

右のお二人ともども、学年幹事として数十年間にわたり、復興募金、周年募金をはじめ幾多の同窓会行事に、同期生のまとめ役として、会発展に多大の尽力をされた方々です。心からお悔みを申し上げ、ご冥福をお祈りします。

42回、本宮淘氏、昭和58年1月9日午後2時急病の為逝去亨年67才。氏は永らくの教職生活のあと停年後は、新潟市の40才以上の人々の登山グループ楽山会のリーダーとして活躍されており、死亡前日にも初春の弥彦山登山で頂上奥の院まで登られたばかりでありました。

59回 坂井未広氏、11月10日腎不全のため永眠、享年51才、明治大学卒業後、経済雑誌の㈱ダイヤモンド社に入社、総務部長の要職中病に斃る。

新潟高校時代サッカー部の初代ゴールキーパーとして活躍。

以上

――同期の親友、花井進氏より事務局に報告ありました。

第35回生 在京者の集い

青陵の学窓を出て五十余年、在京者の集いを開催しました。病気三名、欠席四名、九名の出席でしたが、紅顔の少年が白髪、光頭の集いと相成り、お互いによくまあ此の年まで無事に過ごすことができたものだと感慨無量でした。

（世話人　山名栄一）
尾崎三夫

写真前列左から、籠島秀雄、斉藤昌治、入沢健三、尾崎三夫
後列左から、丸山求蔵、桜井貞一、古賀初男、小林商司、山名栄一、

開催期日　昭和五十八年九月十七日昼
場　所　新丸ビル地下〝ポールスター〟

以上

青山38回 千葉富津岬で 簀立て遊び

青山三八会（昭和六年卒業）の五十八年度、新潟東京合同総会は八月二十八日、千葉県富津市大堀の喜楽館で行なった。

これは昨年秋の同総会で、次回は東京の近郷でやり度いとの意向に添い、房総方面に明るい東京幹事石田弘正君の御尽力と新潟本部のまとめ役、宮路四郎、関秀雄、及び渡辺義平の三幹事の御努力により実行された。

当日、二十八日新潟方面からは上越新幹線を利用した大宮東京駅経由の遠征越後組と東京圏の地元組は併せて総勢二十名、内房線にて木更津より午後三時半頃喜楽館に集合した。毎回顔なじみの連中や或は五十年来の懐旧組等、半世紀を飛び超えた様々な出会いに一瞬顔と顔がくしゃくしゃに入り乱れ、各所に感激が交錯し合ったが、幹事の行程に促されてひとまず各自水着の軽装になり、内房名物の簀立て遊びに出発する事となった。

マイクロバスにより富津公園先の富津岬海岸に出て、も早や歴史的遺跡となった第一海堡を間近にながめられる海面に浮かぶ魚簀に機外艇で出た。あいにく最大干潮に二時

間程遅れた為有志四―五名は腰上の深き迄汐につかりながら手網で簀内の活魚を追いまわしたがようやく簀の隅に追いつめると目の下二尺以上もあるスズキや黒鯛ボラ等々の大小魚が空中を跳ねて逃げ、水が深くて身体の自由が利かず、逆に魚の方が元気よく捕獲に難渋を極めた。水中の有志には、かつて半世紀の昔ボートの琵琶湖遠征で天下の覇を競った河内、近藤の勇士も空中に飛び交う大魚に躍らされ又それを艇上で歯噛みして悔しがり声をからして叱咤激励するかつての豪傑柔道の田巻や剣豪の坂井藤三郎等々、そのドラマの面白さに筆者も捕獲の手が進まず、わずかに小魚二―三匹を空中逮捕。それでも少し専門家の手をわずらわしながら全部で大スズキ十匹位中黒鯛一匹、その他ボラ小魚多数の戦果を収めて引き上げた。

夕刻より総会並に逝去会員に対する黙とうを捧げ続いて宴会にと移行したが、獲れたての大スズキの刺身を始め山海の珍味を賞玩しながら卒業以来五十二年、歳も古稀に至り半世紀余の歴史と時間を飛び超して懐旧の談議に華を咲かせた。やがて美女の踊りを皮切りに越後自慢を披露の遊宴に移り最後は懐しの応援歌校歌を声高らかに豪唱して一応散会。

夜に入って各部屋に移り、かつての古豪や秀才等本人からの初恋物語りや、昔、当時の各種事件の真相等を始め、初耳の真実や珍聞等、経過した歴史の思い出に酒も進み話も弾み時の経つのも知らず、十二時頃ようやく寝についた。

翌朝は木更津川崎のフェリー組と特急、鈍行の列車組の三班に分かれて散会したが、参加会員の意向も実に楽しかったとの評価を得て幹事の一員として他幹事の御努力に感謝しつつ筆を擱く次第です。

次回の合同総会は、新潟方面でと、新潟幹事に一任、お願いする事となった。

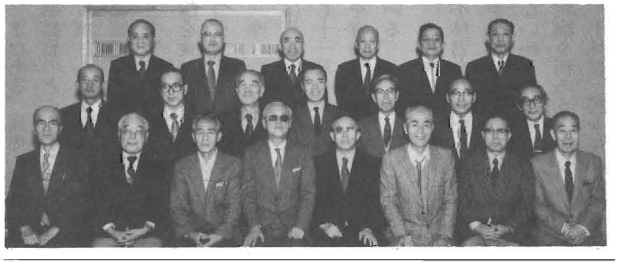
友あり 遠方より来りて 同期会開かる!!

42回

いつも同期会の日が迫って来ると、「さて、今年は何人集ってくれるか」「県外勢は誰が顔を見せてくれるか」「いつもマンネリ化した会合になってしまうが、同期の諸君は満足してくれるか」等々と気懸りになるものだ。

これは同期会を計画、実行される幹事さん方の共通した気持ちであろう。

ところで、今年は色々の危惧をよそに、十一月十二日例



によって例の如く篠田旅館（同期生経営）で、遠くは茨城県からの桑山一郎君、東京より東城真佐男君、北魚沼郡守門村から高橋吉郎君等をはじめとして二十二名が相集いて開催された。

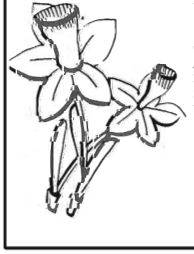
菊地の司会、福田君の挨拶で開会され、型どおりに会は進行された。

今年の珍客は前記の三名の他、久し振りに新津より金沢裕君、初参加の羽田軍次君等でこの変った顔振れが、常連の連中と渾然一体となって、会は盛り上った。

自己紹介では、在校当時はおとなしくて目立たなかったとは云うが、実社会に出てからは、大活躍して功成り名を遂げたもの、当時はやんちゃ者だったが、今ではすっかり角がとれて円満な人格者となった者、或いは同期生同志が助けられたり、助けたりして連帯性を昂めあって、厳しい実社会を渡ってきた体験談等の披露があって、旧交を温め合い、確め合って懐しい雰囲気が会場に満ち満ちた。

桑山君の音頭により、玲瓏の天仰ぐとき……と校歌が斉唱され、また阿部辰一君の往時を偲ばせるような指揮で、三々七拍子の拍手で会は最高調に燃え上ったところで、お互いに健康第一を誓い、再会を期して散会となった。

出席者は写真前列右から篠田富衛、北村惣一郎、桑山一郎、金沢裕、東城真佐男、高橋吉郎、福田茂夫、菊地勲、中列右から石本洪規、本宮洵、鈴木一男、阿部貞一、羽田軍次、斉藤万亀男、藤田儀資、後列右から豊岡憲夫、小野隆一、阿部辰一、今井包和、薄田開元、西山秀夫、写真撮影後出席広沢斉



東京と新潟で 48期会

この秋、四十八期会は東京と新潟で開かれた。

〔首都圏四十八期会〕十一月八日夕、東京、巣鴨の東化ビルスカイラウンジ。五年ぶりとあって常連のほか、亀田通学組、グライダー部を中心に、茨城県からの二人を含め、十七人も参集し、久し振りの盛会だった。

幹事役小池清泰君が関連企業のレストランを破格の安さで提供しただけに気分は上々。卒業以来四十二年ぶりの再会者もあって「おめえさん、だっらね？」とそこここで郷土なまり丸出しの応対にはじまったが、自己紹介、近況報告と進むと、たちまち昔に戻って大声で歓談、メートルも大いに揚って旧交を温め、最後は校歌、応援歌のコピーをうち振っての大斉唱。夜半散会した。しかし還暦を迎え、欠席者の便りからみて、健康に自信を失い出した連中がいたのは一珠の寂しさだった。

出席 淡路和雄、石本三郎、石本文二、法桐光太郎、小池清泰、小林亥一、小林好岳、坂井光信、田村謙二、高松利男、西倉正、長谷川信也、羽入猛、林俊太郎、古屋久男、三浦順之介、森（中野）慶治。

〔新潟四十八期会〕十一月十一日夕、新潟市かき正で。定年組が増えて出席三十七人は十年末の最高。北海道や秋田、横浜、富山などからフルムーンを兼ねた参加もいました。

ことしは広瀬家彦、山口信一、大塚進弥の三君が他界されたので、三君の冥福を祈って黙禱。これまで数年、物故者がなく、いつもこの会で「ことしも欠けた人がなく、まずはご同慶…」と報告していた大塚会長ら三君の急逝を思うと、人生八十年に近ずいたとはいえ、やはり還暦のカベは厚いことが身に泌み、全員健康への留意を誓い合った。

後任会長に満場拍手で大橋明自君を選出。年会費徴収の件をきめて懇親に移った。三分自己紹介では割れ鐘のように十分も演説をぶっ人、マイクを握ると自己紹介そこのけでカラオケをやる人など、中学時代とのあまりの変貌に卒業後四十二年の年輪がしのばれた。

アルコールが回るにつれ、思い思いの輪が出来ては崩れして、童心に返った三時間だった。最後は恒例の各部対抗の応援歌合戦にエッサッサ、オットットも飛び出し、帰らぬ青春をなつかしんだ。

出席 銅治倫、真嶋明、田辺一郎、佐藤俊夫、阿部慶二、斉藤力、天田孝平、近藤源資、東城次郎、長谷川健彦、戸川喜代一、阿部道夫、後藤昇、小林好岳、山崎茂、倉島亮一、大谷一男、本間健四郎、大野（井村）三樹、佐々木常、高木義雄、蒲原宏、林（斉藤）健蔵、吉沢宏英、檻木基、竹石佐忠次、諏訪宏、鶴巻倹介、五十嵐皓太、望月彰、大塚輝善、茨木寛、飯田大透、白石二良、山口素夫、都築弘、大橋明自（都築）

63回生 恩師を囲んで 恒例の新年会

63回毎年恒例の新年会が、一月七日(土)、ホテルハイマートに於て開かれた。出席者は約30名で、恩師の沢山、横山松浪のお元気なる先生を囲んで和やかな話がはずんだ。

尚、万年幹事の赤羽良樹君のご苦労で案内にアンケートを入れ、今後の参考にした。

昨年始めて開いたゴルフコンペが好評であったので、今年はもっと多く集めて、年に2回位開きたいという希望や次回からは女性の同級生の参加も期待できそうとの情報もあった。

山岳部 OB会 今年も20数人で

一月二日(月)西堀の菊池屋に於いて、恒例の新年会が開かれ、昭和38年頃の卒業生を最年長に20数名の参加者があった。

二十歳の体験

90回 鍛治弥生子

昨年の二月五日「'83ミス新潟博」に選ばれましてから約半年間、新潟博覧会のPR等のお仕事をさせていただきましたが、とても素敵な体験でした。

何気ない気持ちで応募したところ、気楽な学生生活とはまるで違う世界に飛び込むことになり、そこでの数々の経験は、とまどいを覚えたり失敗をしたりの繰り返しでしたが、勉強になることばかりでした。

開催前 県内東京各方面へPRに行った時、また開催中県内外のお客様、各界の重役の方々、アメリカガルベストン市や中国黒竜江省ハルピン市からおいで下さった方々等をお迎えした時、「ミス新潟博」であることは大変誇らしい気持ちでした。が、その反面とても緊張し、「新潟の人」として見られることの責任の重さを痛感しました。そしてお客様から「よかったですよ。」とおほめの言葉をいただく度にとてもうれしく、自信と勇気が湧いてきました。またいつでも心からの笑顔で人と接する事がどんなにすばらしいことか経験しました。私は笑顔は人と人の心を近づきやすくできるものだと思います。

今回、いろいろな方とお会いし、外国からいらした方を接待する機会も度々ありましたが、その時に自由に会話できるほどの語学力がなかったことはとても残念でした。今後チャンスを見つけて英会話を磨きたいと思います。

開催中に私は二十歳になりました。まだ歩み出したばかりですが、この半年間を、出発の一ページとして、これから前向きの姿勢で生きたいと思います。

（編集部注）鍛治さんは同窓生ということでミス新潟博として多忙な中を総会にかけつけて、恒例の福引のアシスタントをつとめてくれました。

画人笠原軏とその父漁村(四)

60回　小林智明

漁村を語るに、その師円山溟北について記さない訳にはゆかない。溟北は佐渡の教育者の父といわれた人で、幕末から明治の佐渡の偉人で溟北の教えを受けない人はないと言ってもよく、その頃佐渡ではただ「先生」と言えば、それは溟北のことであったという。

円山溟北、名は葆、字は子光、溟北と号した。文政元年、両津夷の小池長佐の長男として生まれた。長佐の妹が溟北を赤ん坊の時から大変可愛がり、この妹が同じ町の丸山遜卿のところへ嫁に行くときも溟北が離れないので連れて行き、後にこの叔母に子供がなかったのでついに丸山家の養子となった。円山という姓は、明治十七年に溟北が日野資朝の碑を撰文したとき「円山」と書いた。それを、明治天皇がご覧になられたというので大変感激して、それから戸籍も「円山」に改めたのだという。（山本修之助「佐渡の百年」より）天保七年、江戸に出て佐藤一斎、それから亀田綾瀬に学び、同十一年養父の死により佐渡に帰って以来、相川で歿するまでの五十余年間佐渡の教育一筋に力を尽くした。

漁村が弔った両津の「溟北先生之碑」は、重野安繹（成斎）撰、日下部東作書の漢文約一千字ほどの堂々たる石碑である。その終りの方に〝人となり魁偉。談論を好み、音吐朗然、鐘の如し。〟の文字が見えるが、講義をしている溟北の声はよほど遠くからも聞こえたという。また容貌魁偉で耳も大きかったという。〝音容夢に入りて尚依然たり〟と、総角（あげまき）の年頃に入門してその教えをうけた漁村が追憶しているゆえんである。その漁村もまた人に〝音吐鐘の如く〟と評されているのは、師匠ゆづりというべきであろう。

少し話が飛ぶがこの修学旅行より五年ほど後に、新潟中学校に風間槐蔭という国語、漢文の教師が赴任して来て漁村と机席を同じうした同僚がいた。槐蔭は風間儀太郎、安政六年五月佐渡の真野吉岡に生まれた。漁村より六歳の後輩で共に溟北に学んだ同学で、漁村にはことごとに兄事し、また心を許した仲であった。槐蔭の人となりは〝敦厚樸実にして長者の風あり。〟と坂口五峰が『北越詩話』に評している如く、粗豪の漁村とは対象的で、宴席でよく漁村が酒に酔って槐蔭を罵るも、槐蔭はにこにこして争わず、しかし話が一旦師の溟北の事に至れば両人共襟を正し、膝を揃えて坐り直したという。

六月十一日、修学旅行は両津より金沢、新穂と国中平野を過ぎ、清水寺、根本寺に詣でる。十二日には長谷観音、妙宣寺、檀風城趾、国分寺、真野御陵恋ヶ浦と歩き国府川を渡る。国府川は佐渡第一の流れである。漁村はここで「国府川は八幡新町の間に在り。西の真野湾に注ぎ、平流にして極めて穏かなり。海を隔てて遠く能登珠岬と相対す。東南は田野蒼茫として、其の背は則ち連山環擁し、其の最も高きは金北山たり。橋上の眺矚絶佳なり。」と記し

烟中岸橋影依微
橋畔停筑看落暉
江上青山応笑我
黒頭出国白頭帰

烟中の岸橋　影は依微たり
橋畔に筑を停めて落暉を看る
江上の青山　応に我を笑ふべし
黒頭に国を出でて　白頭にして帰るを

の詩に、故郷の山河と久濶の我が姿を詠じている。

六月十三日には、河原田で三十余年前の戊辰の頃漁村が書生として仕えた奥平謙輔を追懐して次の詩がある。

賞罰厳明期至公
士民今尚説威風
莫言一蹶前功廃

賞罰厳明にして至公を期す
士民今尚ほ威風を説く
言ふなかれ一蹶　前功廃ると

不負維新当代雄

負かず　維新当代の雄たるに

奥平謙輔は字を居正、弘毅斎と号し、天保十二年萩に生まれた。毛利藩の明倫館に学んだ俊英で、維新当時、水原町にあった越後府の知事であった前原一誠の部下として佐渡に赴任。思いきった行政改革を断行して、泣く子もだまる「鬼参謀」と恐れられたが、詩文や書にも秀れた人物であった。明治九年「萩の乱」で前原一誠と共に新政府に抗し、三十六才の若さで刑場の露と消えたことは余りにも有名である。

旧幕吏地役人の子であった漁村が、明治二年十六才の時、前年の明治元年に新政府の参謀兼民政方として佐渡に赴任して早々、徳川幕府以来の役人に対し、「家禄の停止」を布令したその奥平の書生として仕えたには、いろいろな事情があったことと推察されて興味深い。

河原田には、また獅子城という昔の城趾がある。現在の県立佐渡高校の在る所である。明治三十五年当時は佐渡中学校であり、漁村の卒える我が新潟中学生一行は、ここで剣道の対校試合を行った。維新前、幕軍はここに陣営を築き、漁村の祖父友水もそこにあった。少年漁村もまた祖父に従ってその官舎に寓居していた思い出の地であった。次の詩がある。

相川　総源寺

幕時曽此駐藩兵
即是当年獅子城
久矣榛蕪狐貉窟
文明今日築中甍

幕時曽て此に藩兵を駐す
即ち是れ当年の獅子城なり
久しく榛蕪狐貉の窟となり
文明　今日　中甍を築く

一行は更に沢根、二見港、春日崎と歩き、漁村の郷里相川に入り、岫雲館に宿した。

十四日には相川鉱山を見学し、採鍊の規模状況をつぶさに記している。その後に漁村は久し振りに祖先の墓参を果すことができた。「余、生前父を喪う。為に祖父友水翁の鞠養する所となる。明治十七年十月、太孺人歿す。乃ち先考と合葬す。再び石を建て以って墓を表す。墓は相川総源寺に在り。」と記し、次の詩を賦して漁村が生まれる前に亡くなった父蘆舟、その父に代って己れを養育してくれた祖父友水らの墓に香華を手向けた。

風樹無由学老萊
追懐往事独低徊
斜陽荒草墓前路
班白児供香火来

風樹由るなく　老萊に学ぶ
往事を追懐して独り低徊
斜陽　荒草　墓前の路
班白の児は香火を供して来たる

この詩には、漁村の万感の思いがこめられていて胸を打つ。生前に父を失くした漁村は、まさに寄るべなく風に吹かれる樹であったが、文武兼備、天性豪放の祖父友水に愛しまれて育った。その友水も元治元年、漁村が十一才の時に七十三才で世を去った。それから四年後に明治維新となり、やがて奥平謙輔に仕える。明治七年より九年までは佐渡中学校で漢学を教えた。そして明治十一年佐渡より新潟に移り県史となり、更に税史となって各地を歴任した。退職後は新潟中学校で漢文を教え、四十九才の今日こうして帰郷して、祖父の墓前に垂れた漁村の頭はすでに班白（ごま塩頭）となっていた。往時を追懐すればただただ夢の如くであったに違いない。

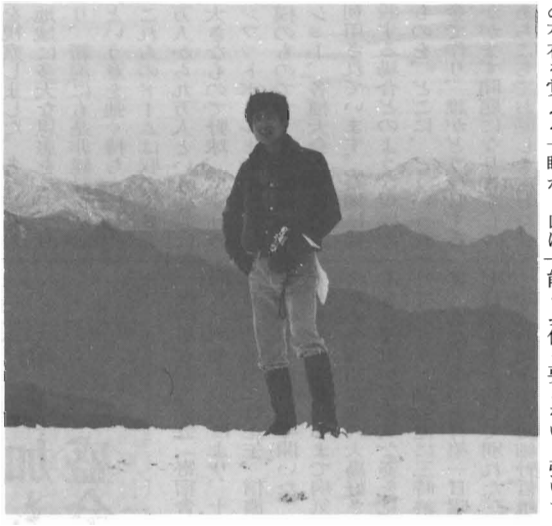
肩の荷

67回　沢田俊一

本校の山岳部の顧問を引き受けて、ずいぶんと年月が経つ。個人山行は別として、顧問として山行日数は、累積して、優に一ヶ年をこえた。登頂した山々を積み重ねれば、エベレストの数十倍の標高となり、担ぎ上げた荷は数トンに達するだろう。そして、家族と職場に強いてきたいろいろな意味での犠牲は、計りうべくも無い。

厳寒のテントの中、か細いライトにキラキラと舞うダイアモンド・ダスト（空中で氷った水蒸気）の美しさにさえも無感動のまま、一刻も早く朝が来ないものかと思い続けた夜も多い。極度の疲労と緊張で水さえも吐き戻しながらも、終日、行動し続けたこともあった。この地獄がいつ迄続くのだろうと、不安と怒りにふるえながら、烈風と豪雨を耐え続けたことも多い。山は、試練を与えてくれる。

自分は今、神の世界に居るのかなと思われる程、深い感動と心の平和を覚えた時も、少なくはない。この種の体験は、非常に個人的な感性の領域であるが故に、表現し難いのだが、何かしら神的なものの存在を覚える一瞬が、山にはある。山は、そんな幸をも与えてくれる。



部員と山行を共にする時、同じ感激を分ち合って胸をつまらせる場面は確かに多い。が、顧問であるが故に味わうある種の孤独感に、時には絶望的にさえなる。幾つかの生命を左右するかも知れない重大な判断を下す状況に置かれた時である。この子たちの生命を、今、自分が背負っているのだと思う時、ただ、その重さに圧倒され、自分の無力さに腹を立て、自分が全能では無いことにせめてもの救いを見い出すのみである。

特殊な登山は別として、山を登るには、多分、特別な才能も身体も要らない。強いて言えば、身心共に、少々、タフであればいい。身体は故障だらけだし、山に入った時のあの独得の気持ちの昂りも、徐々に無くなっている。個人としてはともかくも、顧問としてはもう山に登れないと自分で悟った時に、山靴とザックとピッケルを仕舞い込める勇気と、それが許される環境が欲しい。その日がいつのことかは、わからない。

青陵健児活躍のあと

このところ、母校青陵健男女児の各種スポーツ大会等における活躍がめざましく、新聞紙面をにぎわしているが、大いに喜ばしいことである。

毎年の総会には、同窓会の諸先輩方から、母校スポーツ振興の為のカンパが寄せられるがこれらが在校生の諸君への励ましとなっている事でもあります。ここに秋以来の活躍のあとを報告いたします。

◉**サッカー**、秋季地区大会、一位。◉**剣道**、秋季地区大会女子団体2位、BSN大会、男子団体3位、◉**柔道**、秋季地区大会、中量級2位佐藤朗BSN大会中量級3位佐藤朗◉**空手部**、秋季新人県大会、女子団体型3位。◉**軟式庭球**県一年生大会、3位稲葉義宣・小菅洋司組、3位石橋康弘・後藤忠之組、秋季地区大会2位、間嶋圭太・斉藤正生組全日本軟庭団体選抜大会新潟地区予選男子1位、女子3位県大会2位、◉**バスケットボール**、秋季地区大会、2位、BSN大会、男子3位、女子2位、◉**ボート部**、県秋季漕艇競技大会、2位Aチーム（本間、深井、富田、菅井、浅見）3位Bチーム（若月、五十嵐、中野、加藤、高山）、◉**書道**、17回県高校美術展、入選、長谷川静恵、第58回県競書大会、準特選、織原貴史、円堂愛子、金賞、近藤幸和、長谷川静恵、銀賞、藤本圭子、野村真船、佐藤慶、松岡朝子、

以上のとうりでありますが、今後ともがんばりますので、よろしくお願い（カンパ）します。（学内幹事より）

昭和57年度青山同窓会収支決算書

（自 昭和57年4月1日 至 昭和58年3月31日）

収入の部

科目	決算額（円）	備考
繰越金	295,547	前年度繰越金
入会金	1,092,600	1年生800円×449人＝359,200円 2年生600円×442人＝265,200円 3年生600円×442人＝265,200円 過年度分 広告料×100人＝200,000
会費	3,232,000	同窓会年会費　1口　1,000円
雑収入	21,304	預金利子
合計	4,641,451	

支出の部

科目	決算額（円）	備考
人件費	2,140,198	職員1人給料手当、社会保険料
通信費	536,800	会報発送、総会、後援会、新年会案内郵便料、振込手数料負担金
印刷費	92,160	封筒、振替用紙、予算、決算、案内状印刷代
慶弔費	172,430	会員慶弔電報料、香華料、離任職員餞別
退職積立金	50,000	
諸費	4,110	消耗品費等
会報印刷費	374,000	年2回発行会報印刷代
会議費	232,328	総会、新年会、役員会、会議費、東京総会、支部総会出席会費及び旅費
卒業生記念品代	141,960	卒業生におくる湯のみ代
青陵祭補助	80,000	
通信制補助	210,500	通信制同窓会規約入1口につき500円　421口分 通信同窓会へ補助金として拠出
子備費	80,000	東京同窓会補助金
合計	4,114,486	

収支差引残高 526,965円　残高処分案　基金積立 200,000円　次年度繰越 326,965円

昭和58年5月11日

上記の通り相違無いことを確認致します。

福山　健㊞
澤山　巌㊞

昭和58年度青山同窓会収支予算書

（自 昭和58年4月1日 至 昭和59年3月31日）

収入の部

科目	予算額（円）	備考
繰越金	320,000	前年度繰越金
入会金	1,054,000	1年生 [illegible]円×450人＝360,000円 2・3年生 [illegible]円×890人＝534,000円 過年度分 [illegible]円 2,000人×80人＝160,000円
会費	2,900,000	同窓会年会費　1口　1,000円
雑収入	5,000	預金利子
合計	4,279,000	

支出の部

科目	予算額（円）	備考
人件費	2,150,000	職員1人給料、手当、社会保険料
通信費	600,000	会報発送、総会、新年会、役員会案内郵便料、振込手数料負担金
印刷費	100,000	封筒、振替用紙、予算、決算、案内状印刷代
慶弔費	50,000	会員慶弔電報料、香華料、離任職員餞別
退職積立金	50,000	
諸費	19,000	消耗品費等
会報印刷費	370,000	年2回発行会報印刷代
会議費	300,000	総会、新年会、役員会、会議費、東京総会、支部総会出席会費及び旅費
卒業生記念品代	160,000	
青陵祭補助	80,000	
通信制補助	200,000	通信制同窓生会規約入1口につき500円　400口分 通信同窓会へ補助金として拠出
子備費	200,000	
合計	4,279,000	

会費納入にお願い

青山同窓会費は、年会費一口千円です。できるだけ一人二口での払い込みをお願いいたします。納入先は母校同窓会事務局、又銀行振込（別紙の口座）又は、新年会・総会の会場で受付けております。納入者には年二回、会報をお届けいたします。

「都市作りに参加しよう」

小疇弘一

現在青年会議所という団体に所属しています。明るい豊かな社会作りを目指し様々な活動を行っています。昨年アストロドーム・トライ委員会という委員会ができて、その委員長を努めました。アストロドームというのは、アメリカ、テキサス州ヒューストンに20年程前に建設された世界最初の屋根付野球場の名称で「新潟に大きな容れ物を！」という運動を起すのが委員会の目的でした。本物を見ないと話しにならない。というので二月に仲間八人でアメリカ視察を行いました。まずヒューストンでアストロドームを見てニューオリンズでスーパードーム、そして北へ上ってミネアポリスでメトロドームを視察しました。各々がその地域に多大な恩恵を与えており、新潟にも是非建設したいという意を強く持ちました。これらのドームは収容人員五万人から九万人という非常に大きなもので野球、アメリカンフットボールまでできる規模のものです。さらに見本市ショー、各種大会と多目的に利用されています。新潟に建設する場合どのような規模のものを、どこに、どういう資金で作り、誰がどう運営するかがまず問題になりますし、あちこちでお話しをするたびに質問を受けました。しかしそれは非常に難かしい問題で単に建物だけにとどまらず、広く都市的な見地で捕えなければならない事柄です。我々青年会議所メンバーだけではなかなか良い考えが浮かびません。行政の方々と話し合いの機会を持ったり、専門家からも多くのアドバイスをいただきました。私個人的には、まず市民運動として盛り上げることが必要だと思っています。アンケート、署名運動、募集等々、自分の住む都市は自分達の手で良くしようというムード作りが大切です。三十年後、五十年後の新潟像を市民みんなで真剣に作り上げけゆく姿勢が生まれてきたらどんなにすばらしいことでしょう。

私達の運営に御理解と御協力をお願いします。

青山渋柿会

初参加もあり盛会に——！

復活第七回渋柿会（寄宿舎同人）例会を恒例により、十月第一日曜の二日正午、信濃河畔の田中ホテルで開いた。

出席者十四名、今まで病気のため今回初参加の大島好さんも、濁川から元気な姿を見せて下さり、盛会裡に三時終宴、また来年の十月第一日曜七日の再会を約して別れた。

写真前列左から(38)細野哲雄。(37)河内正彦、(33)永井行蔵、(33)佐野賢一郎、(35)大島好、(33)佐々木勧、後列(35)近藤百之、(35)内田善衛、(35)武田慎三郎、(36)富所太三郎、(36)吉川恒吉、(33)川村欽治、(36)山田利平次、(38)近藤円

（近藤円　記）

— 連載 —

ハイティーン水泳 新中・新高④

60回　平田大六

9　神伝流派の人々

新中二年になったとき、教育制度がかわった。入学試験を経験しない市立第二中学校の一年生が同居し、水泳部へも入ってきた。しかし、この夏も私は「雑魚」の組からぬけ切れないでいた。

ある日、江口文助（21回）師尾源蔵（24回）という大先輩がプールへのりこんでこられた。すぐ裸になってプールへとびこまれたが、奇妙な泳ぎ方をされるのである。

スピードはないが、波もしぶきもたてずに進んでゆくのだ。古式泳法の神伝流だ、と上級生が説明してくれた。

師尾先輩は、ゴム印で「師尾源蔵」とやや斜めに捺(お)した小さな厚紙を名刺だといって私たちに何枚もくれた。

そして、この夏は、みんなで佐渡からここまで泳いでみないか、と云われ、カラカラと笑われた。子供が、わざと小便をかけ合ってふざけているような笑顔であった。

昔の新中水泳部は県下の覇(は)者であった。大会のたびに負けていた私たちの水泳部は、いつもそのあとで、このことを上級生からきつく云われて、部室の板の上に目をつむって正座させられた。負けかたのひどかった日、とうとう護国神社の砂浜に連れてゆかれて、そこで座らさせられた。先輩もきちんと座った。その目の前にひとつの碑があった。

白い石の表面に次の字が刻まれていた。

「新潟市水泳之開祖、蟄龍、村山正臣先生記念碑、先生作州津山藩士神傳流自然派水泳術之開祖也自明治三十二年至同四十二年間於我新潟市指導啓★水泳術★後大正三年卒干備後烹年七十三歳、昭和三年七月、門人同龍建之、流れてはまた水となる柳哉」

この年、「師尾団長」の指揮で、越佐海峡横断継泳はみごとに成功した。

（つづく）

編集後記

★ あけましておめでとうございます。昨年の総会は、名実行委員長筑波氏卒業のあとをうけた新小林委員長のもとで新しく着席方式の懇親会が行われました。報告は練れた筆の上村幹事長より。

★ 今号では、副幹事長として会の発展につくされた、大塚進弥氏をはじめ、白山さまの小林寛直氏、味方恭一氏、岡山正雄氏と四氏の追悼記が並びました。それぞれゆかりの方々にお願いいたしました。

★ 同期会報告も各期幹事より寄せられたものを載せました。写真が一段となり、顔が見えないとおしかりを受けそうですが、紙面の都合もありお許し下さい。同期会報告はできるだけ文章を手短かにお願いし、写真を大きくしたいと思っております。

★ 母校山岳部の顧問である沢田氏、ミス新潟博の鍛治さんには、編集部からの依頼に応えていただきました。

★ 小疇氏のアメリカ見聞記では、新潟の街の発展を願う若い世代の動きをご理解いただきたいと思います。

★ 連載2点をはじめ皆様のご協力を感謝致します。今後とも会報発行をご支援下さい。

昭和58年度青山同窓会費納入者

（4月より12月20日まで納入済のもの）

未納の方は3月までに納入下さるようお願い致します。

（郵便振替口座　新潟5-4455青山同窓会
第四銀行学校町支店口座　0275210青山同窓会）

期及氏名
18回
玉木繁治
21回
古田幸三郎
水沢嘉一郎
吉田武四郎
22回
近田助治郎
中沢信吉
23回
佐藤俊次一
清水浩一郎
土屋哲二郎
西山辰蔵
24回
樋口政和
25回
真保吾一
長野善三
26回
伊藤威夫
苅部信雄
木村耐七
桑原自彊
根布義雄
長野昌隆
27回
内山惇一
斎藤澄丸
田中市助
田中英一
水上卯吉
真壁喜三
28回
大谷鐘吾
小原武一郎
小林十一郎
塚田武雄
野村治朗
早山洪二郎
広橋清
藤井浦茂
松田安懐
水野鉉三
村田凡愛
山崎安平
29回
朝倉良三
石崎重郎
伊藤洵治
太田久郎
北村太市
田村文三郎
徳永興次郎
松井達夫
武藤経世
30回
伊藤敬太郎
上原勝次
遠藤種二
中居直
南広
山添直二
山宮英郎
渡辺五郎
鷲田徳雄
31回
浅海勝治
岩田孝三郎
金田井五也
田村倉熊清
名中松井道夫
本多田深忠
村田下忠大
山渡辺勝男
渡渡辺豊松
渡辺政吉

期及氏名
32回
浅岡博
大島公男
大塚為吉
笠原直三
木村義也
北村博繁
久我徳示
解良順治
桑原靖雄
斎藤凱雄
沢山八十松
清水七治
霜鳥重策
菅原憲雄
曾我英彦
竹林松二
中原彦之丞
長谷川政二
樋口昇
星野忠五郎
山崎新次郎
33回
磯部佐吉
植木実就
大坂清
金子英二
川上村英
川村欽治
小林泉
佐野賢一郎
佐々木勧
清水弥寿雄
高橋又治
永井行蔵
平石恒夫
広瀬忠広
福山忠司
星順治
堀川秀一
松浦錦郎
松山添三郎
山田平五郎
山田又一
若林清
34回
今井一雄
小野塚忠義
小田久夫
大西正三郎
柏森忠四郎
神田坤六
清野治力
北村治元
木村谷作
櫛谷吉作
佐久間信吉
佐々木栄一
佐藤彰治雄
坂井義貞
相馬貞蔵
塚田大願
富川潤二
長浜浪一
林啓保
林耕介
樋木平
堀吉藏
堀保利
真野孝亮
宗山像達雄
渡辺剛男
辺芳雄
35回
五十嵐久四郎
飯豊雄
今成一郎
内田善衛
岡島十兵衛
籠秀雄

期及氏名
小柳胖三
熊倉雄三
倉田貞三
小出藤百之一
近桜井貞治
斎藤昌巌
沢須藤良明
相武馬慎三郎
中村信一
丹古路信男
丸川喜久次
丸山求蔵
山名栄一
36回
青山勇三
青阿柳英夫
石部市藏
橋健男
池政栄
今井二雄
入植芳雄
植木正平
宇佐美博
上野一益
小川種太郎
岡田信雄
加賀田二四夫
加山春雄
風間政一
風間忠治
河辺昌郎
君井宣苗
久保文
久保田昌次郎
倉田亨
児玉賢信
佐藤助
斎藤吉之四郎
斎藤英雄
関根達夫
関根勤
田中武
田中清太郎
寺井元一
中山義一郎
西村清郎
西藤司郎
針貝信吉
伴修
樋口均
福田謙也
前田節雄
藤田九三郎
丸山岡寛
丸山英二
宮尾正雄
宮島美代吉
宮川恒吉
村山信雄
37回
阿部広雄
浅井宏
井村正樹春
井藤正平
榎並季稔
遠藤吉三
笠会純道
黒川武三郎
小林正二
鈴木正二
田中俊二
田田中真
田田中恒
田田中巻

期及氏名
二木哲男
富永良一
野末武一夫
馬場幸一郎
原林
真柄元四郎
三武間裕
村木門惇吉
吉若田正忠蔵
38回
安荒達奎吾
池田田正昭
石太田弘正
大太沼正一
桶谷沢勇信
小河上藤由秀
加勝野林虎英
清小後藤三郎
近笹沢野林一郎
川仁十
重白井野正謙
渋関木秀
田田中松二
田竹石三郎
高野橋政英
高等々力英勇
田村
中村宮
藤舟崎野哲一
細真柄川良四
皆宮諸橋
山口五郎久
山田重正
山田田昇
吉吉田田正昭義
渡田辺
39回
阿部尚哉
阿部藤高百
伊石高井信正
今猪原恵
上大野田正孝
岡川崎田輝
鎌北川林立正
小小小林林芳
斎藤平
佐佐藤裕一二
佐佐藤締
佐佐藤孝正
志賀光木中橋正
照鈴田高
中村

期及氏名
山田弘
山柳本実
八木勝三義
渡辺卓富忠
渡部辺
渡辺
42回
阿部辰一
相沢康平
飯島山一良
石今井包和
今泉本景喜
石田洪
薄野総開元
大大谷修一郎
岡嘉三
岡富之一
加藤悦助
金沢裕平
菊地林勲
神林駒熟
串田次一
斎藤万亀男
佐々木庫
佐藤実
塩谷正夫
鈴木内一男
武内幸
高橋二郎
高野吉
高橋
高橋
玉木深
堤清
富田秀
塚野一
東城真佐男
鳥羽正
豊岡憲
中野一
西田秀
樋口
福田茂
藤田儀
広沢
星野
本田隆
前田次
丸山平
三国文治
村田
本宮
43回
今井亮
岩永護
市橋敏
小野寺
小沢省
加賀田達
加藤行
鍵富
菊池芳
草野
倉井
栗山房之
近藤種
黒岩川
笹川間正
佐藤
佐藤彰
佐藤和之
佐藤貞真
佐野田
沢田木貞
渋

期及氏名
鈴木英夫
竹石真久
田中功
田中一郎
田中憲
谷虎三
滝沢義雄
等々力迪
長島信
長北小弥太
中山良
橋本泰
長谷川健次郎
治雅樹
福田賢
本間泰
星寛
丸山
丸山洋
村山長
綿井
46回
上杉栄一
江口松
遠藤朔
遠藤義治
大越健
大津
小熊幸
押加木範
片川桐国
川原上
川谷
熊藤
工栗原
小小林
小小林
小佐藤
下渋谷
関慧
高高橋敬
高高島達
谷高橋
芽原
塚野
土屋
椿巻
鶴所
富永井達
中田紳一郎
新田公
西馬場芳
浜田敏
原浦幸
樋口川敏
広広神良
藤巻田富
本本田貫
本本木照
峯尾益
宮湊隆
横山二
米山原進
山市
47回
朝日翠
上竜
飯沼藤元
伊藤村
岡村川俊
小間
風間一
黒倉井整
剣持栄一
古俣浩郎
斎藤障太郎
清水善二
巣山雄
田中
鳥居俊
中条新
中村正

期及氏名
新津義雄
西芳喜郎
畑川博
広見晃
二本間日吉
丸山鉄治
森田美寛
山城彬成
和久井淳一
涌井寿一
渡辺輝澄
48回
秋元俊明
阿部慶二
阿部道夫
天十嵐皓平
飯塚正太
大谷雄
大坂保男
大橋明自
小林清常
小大塚弥
大野樹
樫木村基
北島英朗
倉池亮一
小小池清泰
小近藤好岳
佐藤源資
諏藤素一
関訪宏
田口太郎
田中湖延
田城巻倫
鶴田検
土東城節
銅治次也
戸川喜代郎
中村英一
中内藤啓治
森崎慶一
野亀治
長谷川健六
樋口彦
本間五通
真島夫
南緑八明
望月郎
八木
山田正
山口愛猛
吉沢宏英
49回
相沢春吉
朝倉惣三
井上正
内田文雄
宇佐美
小田嶋
尾崎富衛
笠原省吾
梶原計佐
梶神山勝清
神木村光雄
木工藤竜一
倉田弘安
小林資孝
小小林直一
駒林幸行
斎藤勝
斎藤敬
白川谷己
渋谷直保
清水直城
仁高保彦
田島秀人
田中沢久雄
田竹山和盛
中村行内
永松広一
羽田俊徳
原田湛久
原林玄夫
林文猛
弘中博夫
藤田芳元
藤田甚郎
舟崎裕二郎

期及氏名
鈴木英夫
竹石真久
田中功
田中一郎
田中憲
谷虎三
滝沢義雄
等々力迪
長島信
長北小弥太
中山良
橋本泰
長谷川健次郎
治雅樹
福田賢
本間泰
星寛
丸山
丸山洋
村山長
綿井
46回
上杉栄一
江口松
遠藤朔
遠藤義治
大越健
大津
小熊幸
押加木範
片川桐国
川原上
川谷
熊藤
工栗原
小小林
小小林
小佐藤
下渋谷
関慧
高高橋敬
高高島達
谷高橋
芽原
塚野
土屋
椿巻
鶴所
富永井達
中田紳一郎
新田公
西馬場芳
浜田敏
原浦幸
樋口川敏
広広神良
藤巻田富
本本田貫
本本木照
峯尾益
宮湊隆
横山二
米山原進
山市
47回
朝日翠
上竜
飯沼藤元
伊藤村
岡村川俊
小間
風間一
黒倉井整
剣持栄一
古俣浩郎
斎藤障太郎
清水善二
巣山雄
田中
鳥居俊
中条新
中村正

期及氏名
新津義雄
西芳喜郎
畑川博
広見晃
二本間日吉
丸山鉄治
森田美寛
山城彬成
和久井淳一
涌井寿一
渡辺輝澄
48回
秋元俊明
阿部慶二
阿部道夫
天十嵐皓平
飯塚正太
大谷雄
大坂保男
大橋明自
小林清常
小大塚弥
大野樹
樫木村基
北島英朗
倉池亮一
小小池清泰
小近藤好岳
佐藤源資
諏藤素一
関訪宏
田口太郎
田中湖延
田城巻倫
鶴田検
土東城節
銅治次也
戸川喜代郎
中村英一
中内藤啓治
森崎慶一
野亀治
長谷川健六
樋口彦
本間五通
真島夫
南緑八明
望月郎
八木
山田正
山口愛猛
吉沢宏英
49回
相沢春吉
朝倉惣三
井上正
内田文雄
宇佐美
小田嶋
尾崎富衛
笠原省吾
梶原計佐
梶神山勝清
神木村光雄
木工藤竜一
倉田弘安
小林資孝
小小林直一
駒林幸行
斎藤勝
斎藤敬
白川谷己
渋谷直保
清水直城
仁高保彦
田島秀人
田中沢久雄
田竹山和盛
中村行内
永松広一
羽田俊徳
原田湛久
原林玄夫
林文猛
弘中博夫
藤田芳元
藤田甚郎
舟崎裕二郎

期及氏名

紘勝洋雄夫滋夫久修介
原国田下田井山本田辺　濱
松三右宮村森横山山渡
政　紀　治憲
政　田　忠　紀　治　憲
秋井植川菅滝中丸野
浜上木上井沢野山鉄正
海山林藤川羽
井内小斎立丹
中鈴中
相上和川志関高田田殿藤鈴
馬田泉上田常
文
中秀重一
中間田木勝
加川田塚福
藤勝士
上辺静
辺本田
田芳誠博
橋泉博康昭俊
原野田岡
石大小佐中牧山吉
十嵐祐司
瀬耕輝
村直昭隆
中古薗
鈴木雅夫
古川学
中野ますみ
古川靖
小林正明
中田一男

63回
阿部　達樹男二治雄聡子男夫一之一之至夫衛元平之美夫一樹芳一夫男
赤池居和伊薄江大小小会斎佐白鈴大滝土土戸平福水吉山渡和
良治正修純　律道忠淳　正勝博　三伝正浩信一恒欣義雅恵昌和
城泉南田口谷畑野塚　斎藤藤倉木坂沢田屋井野住落田田辺田
64回
内風小川熊小近坂佐斎坂椎真高高田忠塚中中庭星畑松山山山
山公士寿
島崎谷林藤井藤木井名後木橋村　本谷山山　野原根崎内
清俊陽幸　睦荘睦幸　昭暉光輝暢　晋迪伸雅
65回
安池岩小大大尾笠加近斎佐三三寺藤根伏三皆
食　悟隆一征一隆　成純良　輝奈武　德青行実也司義
野沢崎堀崎原藤藤藤藤藤林林崎井津　重　勝英泓
66回
小小風加片熊小下関竹田高富
川亮津聡孝　国啓友篤健栄文俊
畑志間藤山谷林川　石村島田
一子一一子一真男志也司一光治枝

期及氏名

臣誠梁孝央康子武弘門功稔
靖
原本本沢岡口田田辺田瀬崎
喜幸尚正エ六左エ
67回
阿部　智俊作功宏紀彦治夫一子一一郎夫真仁彦子允作吾朗夫子市透
石今岡小金川岸君小斎沢関高高仲中広星星本松右山山山渡
井泉崎川井崎田　興英晋美　久俊昭三信　達理真
田根橋橋村野野　藤田根橋村林藤　田井田口田田部
68回
赤板北小駒斎進田源渡
塚垣村林林進田中川辺　五昭泰和四忠代光晃泰　十二男作子郎雄子弥三彦
69回
石大小佐佐城高田敦寺栃西樋藤本皆村
本森町藤藤田橋宮井尾倉山浦　隆ゆ聡隆敬義栄芳　太か郎り敏子輔子教睦一樹浩勝一夫譲郎夫
紘信
泰次郎
川山
70回
伊小笠風金金川小斎斎杉滝高田田等田外新能藤平西
藤善瑞原間子田林藤藤本波尾中中力辺田田田林林田
允枝仙利三史人昭道攻義介明信夫康豊一一子子郎衛
大秋健正昌紀弘　正祐英由弘　雄誠直朝和牧

期及氏名

71回
浜上木上井沢野山鉄正
和　子
岩紘
72回
海山林藤川羽
明義昭正雄之
正俊克正
73回
野木野
治淳治
中鈴中
74回
馬田泉上田常
文
夫隆潤耕弘郎憲一明政己紀
橋秀志
中登
中秀重一勝
田木
士滋幸修実
加辺本田
静
76回
田芳誠博
橋泉博康昭俊
原野田岡
博吾義世次次郎俊
78回
瀬村薗
耕直昭
司一輝隆
79回
木雅夫
80回
川学
81回
野ますみ
83回
川靖
84回
林正明
86回
田一男
通信制
２７２名

期及氏名

了一知良晋強一孝人和雄太吉一松博次雄郎寛男次猛郎郎尚雄郎
藤　素志録　重恵義泰繁泰新勇　省忠一　繁信　一三武和一
斎藤塩茂島島真須巣高田千中西波花花浜藤藤細堀丸三村目百山
善野田岡保貝山橋中葉川脇田野沢井田井由貝川山村山黒川精
谷
52回
青赤阿安礒石小押乙上折加河川北菊欅斎斎斎坂佐佐佐佐沢塩椎白真鈴関武高田田津筑長中永永長成丹野橋長早広広藤本本三皆宮宮村村森森山
山柴部東　崎沢木田林林藤井上村戸藤端合村地田藤藤藤藤田田谷井保木口笠橋中中中野波尾川井井沢田羽崎本谷川蓁川川田田間昭田井川尾尾修川島　田崎
秋道康昭興博川村川山松義山瀬沢川田間潟本木田辺　義昭寛秀敏昭伸　宏　泰　健長正正　昭順陸　四健六昭　川山河　川見野山崎川黒井川田　隆太
秀豊由夫彦一栄郎英人男八二吉男郎弥兌郎郎夫隆三三夫郎弥男雄二昭郎二雄雄治助平二明郎郎一二一昭朗行彰助勲二一等三二作昭克郎滋郎哉衛
54・55回
清白瀬大高高竹田鶴寺根中中橋長長馬一藤布堀前真丸山山山吉
東康昭賢　悦善忠達尚　秀洋一亮　陽健賢俊義栄信　三　久璋芳
51回
青赤朝池歌永大大小小落岡笠鹿笠唐北河桑小小小近近笹
博夫彦城司博治宏策郎一毅治謙治二治茂渡熙治郎二治夫之男
貞蓮正正昭昭　雄六　芳　合　耕　本　幸仰浅　原富孝慎国俊重
井倉田川木川関黒野　井島原沢村路瀬原富林林藤藤川
三
56・57回
昭男弘邦磯部阿有

期及氏名

郎赳夫春亘　男夫彦助元茂吾司衛夫武夫雄孝雄男夫助義一造夫夫弥一司丸郎治次功勇夫雄夫一宏豊隆
二昭
和千
義
53回
湯吉吉渡渡
木田田辺辺
柳崎沢月立藤倉井合口地島林林　井川原木崎本本田辺
邦静嘉之作　憲久忠信　和久茂辰泰武之徳長隆国秀一治隆和一義山井瀬沢川田間潟本木田辺
謙重恵義泰繁泰新勇　省忠一　繁信　一三武和一勇三三夫郎弥男雄二昭郎二雄雄治助平二明郎郎一二一昭朗行彰助勲二一等三二作昭克郎滋郎哉衛
一石石稲今遠大笠河川菊久小小小近坂笹篠篠鈴田高橋前増高高長野広広藤本桝松正山渡
浅妻湊貫啓武隆　一和健哲正　元誠仁俊　半　克　達　哲寿和幹一　見誠直　正明益利徳輝義源淳賢迪
54・55回
清今貝片片金河小小斉笹佐渋真進鈴砂清早高高土常寺富等中永仁野長保星松宮前松武村山山吉和
昭敬郎郎昭弘清彦夫一也紀登一慧一雄晃吉卓威真禅剛夫男男町郎昭哉人修春芳敏雄雄一夫行夫二夫
三
義津桐子路林山藤谷藤木司谷藤木山野福橋井田木崎所力村井多崎谷倉井本尾田浦藤山田際原田
昭
貫
武隆
一和健哲正　元誠仁俊　半　克　達　哲寿和幹一　見誠直　正明益利徳輝義源淳賢迪
56・57回
昭男
弘邦
磯部阿有

期及氏名

純策尋衛良徹一敬一衛夫郎孝己衛則策夫谷彦郎衛一平孝郎一豊恒一一寧義彦吉彰晨一郎介郎彦宏介康二夫一男剛五三男　士夫哉平治司良郎郎哉広坦章夫松彦男一一夫彦司広浩吾男一嗣夫郷吉満光茂夫男司励平
久兆千幸恒　玲信信説泰七
久保　勝善勝吉弘瑞一一
川田川上田倉瀬城渕野藤坂大大折加加岡織小笠籠川木小小佐佐斎残塩高建高中中中堀並庭伴広藤伏星丸三皆目松村山
市池市井石岩岩今岩浦伊逢大大大片加清木倉駒近近斎坂佐佐沢鈴曾高田種長早平福福藤藤松丸宮宮室
原戸藤藤田田田原島崎村島林藤藤藤間谷谷見部塚川藤山　河山　川井見野山崎川黒井川田
健一尚直直太勇　謙静　久恒勝　昭四　健六昭　泰　健長正正　昭順陸
58回
柳田村代藤熊関石山桐藤川村島形　藤井藤藤　木我橋中村野川山島田井崎浦山川崎谷
広竜末荘整勇允一芳欣高善紀勇寅哲俊熙明俊隆　昭俊祥桂哲詩惣　祥幸幸近昇
清
58回
士夫哉平治司良郎郎哉広坦章夫松彦男一一夫彦司広浩吾男一嗣夫郷吉満光茂夫男司励平
青生植歌遠小大大大片加清木倉駒近近斎坂佐佐沢鈴曾高田種長早平福福藤藤松丸宮宮室

期及氏名

夫教宏忍博　造実造男一郎夫樹健雄駸三彦明夫雄一進甫三彦毅円一郎忠健三進誠郎之夫樹学雄一彦門世介吾雄夫満　彰雄一司郎檀郎之一男志実吉男忍彰夫直亨明史郎一功之之雄史教也夫夫治彦満夫夫雄夫六博
俊
内野田内之辺好
59回
安飯伊五飯牛小奥大岡笠神菊倉小笹佐佐重渋茂島関高高高種能花中長早樋広藤藤堀松山山山吉渡渡渡
部邦
塚修
藤正嵐十村素木熊村川田井田地品島川藤野木泉崎根橋　山昇　彰陽二　見岡登井野島山口野由原川本徳左エ宮田田辺辺辺
造
吉英繁　恒　悌晴克道一純行幸喜　省　一康三　幸兵俊エ英一陽幸友
60回
阿有五池石市入上内大岡加金櫛熊熊小小小小小小小古高斉斎杉田玉外富雛西野長橋秦平福
部明　秀邦　厚一紀　文雅真英嘉　常二不谷谷田石出林林林林林林林山山野木藤山中木山田波脇村谷本　田田
彰
一
郎
壇郎之一男志実吉男忍彰夫直亨明史郎一功之之雄史教也夫夫治彦満夫夫雄夫六博
一司
60回
鳴
61回
浅赤池伊居江大加加川岸木久小小小近近佐佐三塩清菅鈴高関長長知長日藤松丸宮矢山山渡渡
間堀田藤城口塚藤藤崎田村須　池杉林林林　藤々木藤条谷水原木橋根川谷谷野谷川暮井尾山川島田本辺部
道和元良慶良為好栄栄哲美　秀幸知修英　真和　淳和正　享康一義　真　通　浩克　和
62回
青安荒石石石井上大石小神小木近斉佐佐佐坂新田田田田田滝立中中中原平星町松原堀三三三守村結渡
木食木黒田田田泰二原谷田黒成池村藤藤野藤藤藤井谷子村貫沢川川川村洋滋原野田　昭正栄竜愛成隆　俊哲
留恒貞　忠
昌粛健　哲武誠幸　照次誠寿国洋俊二康　国浦崎口木城辺
蔵昭至恒勇郎郎明巌寛一一治望朗健作司也男稔元雄郎一子臣吉彦郎郎男仁仁夫雄一彦三夫夫修郎也
63回
阿部羽城居和伊薄江大小小会斎佐白鈴大滝土土戸平福水吉山渡和
達樹男二治雄聡子男夫一之一之至夫衛元平之美夫一樹芳一夫男　子郎嘉介一助和英一一男磐博弘一司雄司雄繁武夫明栄明三照理三一郎明広夫彰夫隆三治勲義稔
良治正修純　律道忠淳　正勝博　三伝正浩信一恒欣義雅恵昌和
城泉南田口谷畑野塚　斎藤藤倉木坂沢田屋井野住落田田田辺田
64回
内風小川熊小近坂佐斎坂椎真高高田忠塚中中庭星畑松山山山渡
山公士寿
島崎谷林藤井藤木井名後木橋村　本谷山山　野原根崎内
清俊陽幸　睦荘睦幸　昭暉光輝暢　晋迪伸雅
65回
安池岩小大大尾笠加近斎佐三三寺藤根伏三皆
食　悟隆一征一隆　成純良　輝奈武　德青行実也司義
野沢崎堀崎原藤藤藤藤藤林林崎井津　重　勝英泓
66回
小小風加片熊小下関竹田高富
川亮津聡孝　国啓友篤健栄文俊
畑志間藤山谷林川　石村島田
一子一一子一真男志也司一光治枝

期及氏名

臣誠梁孝央康子武弘門功稔
靖
原本本沢岡口田田辺田瀬崎
喜幸尚正エ六左エ
67回
阿部　智俊作功宏紀彦治夫一子一一郎夫真仁彦子允作吾朗夫子市透
石今岡小金川岸君小斎沢関高高仲中広星星本松右山山山渡
井泉崎川井崎田　興英晋美　久俊昭三信　達理真
田根橋橋村野野　藤田根橋村林藤　田井田口田田部
68回
赤板北小駒斎進田源渡
塚垣村林林進田中川辺　五昭泰和四忠代光晃泰　十二男作子郎雄子弥三彦
69回
石大小佐佐城高田敦寺栃西樋藤本皆村
本森町藤藤田橋宮井尾倉山浦　隆ゆ聡隆敬義栄芳　太か郎り敏子輔子教睦一樹浩勝一夫譲郎夫
紘信
泰次郎
川山
70回
伊小笠風金金川小斎斎杉滝高田田等田外新能藤平西
藤善瑞原間子田林藤藤藤　正祐英　由弘　雄誠直朝和牧
允枝仙利三史人昭道攻義介明信夫康豊一一子子郎衛
大秋健正昌紀弘
辺田田田林林田
71回
浜上木上井沢野山鉄正
和　子
岩紘
72回
海山林藤川羽
明義昭正雄之
正俊克正
73回
野木野
治淳治
中鈴中
74回
馬田泉上田常
文
夫隆潤耕弘郎憲一明政己紀
橋秀志
中登
中秀重一勝
田木
士滋幸修実
加辺本田
静
76回
田芳誠博
橋泉博康昭俊
原野田岡
博吾義世次次郎俊
78回
瀬村薗
耕直昭
司一輝隆
79回
木雅夫
80回
川学
81回
野ますみ
83回
川靖
84回
林正明
86回
田一男
通信制
２７２名